古墳時代鉄製武器における「伝世」の考え方

水野　敏典

はじめに

出土考古資料における「伝世」を考えるには、まず２つの年代を認識する必要がある。ひとつは生産もしくは標準的な使用年代であり、もう一つは、その年代から離れた消費・廃棄年代である。そのふたつの年代差が世代単位を超えれば「伝世」と認識されると考える。

古墳時代の鉄鏃や直刀や剣に代表される鉄製武器は、主に古墳出土の副葬を一括消費と捉えた消費地編年をもとに相対年代を把握する。これと対を成すものに生産地編年があり、生産を単位として相対年代を把握する。さらに、生産地編年は須恵器などの窯の出土品を一括資料として相対編年を行うものと［田辺 1981、中村 1978 ］、銅鏡などの生産工房での一括性は確認できないが型式学的な諸要素から編年を行い、紀年銘などを用いて生産年代をあたえるものがあり［岡村 1993］、編年といっても性格は多様である。前者は、出土品を用いており方法論的な確実性が高いように見えるが、窯址の調査の大部分は製品の出荷後で、出土品は灰原の廃棄品に頼ることになる。同じ窯での複数回の焼成が行われた場合に同時焼成の製品の分別が困難であること、また、窯内の一括資料であっても型式分類上の１型式で構成されるとは限らない点に曖昧さを残す。後者の銅鏡編年の古墳編年への応用は、近年の岩本崇の研究が代表的である［岩本 2020］。中国鏡は中国各地で多元的に生産されるが、系統的に分別を進め、前期では特定の工房での製作が想定される三角縁神獣鏡の編年を軸に生産地編年から古墳築造年代を整理している。消費地編年にもとづく鉄鏃などの鉄製武器の「伝世」とデザイン的な復古をどのように捉えられるのかを、鉄鏃の編年研究と、鉄鏃と刀剣類を例に挙げて考えてみたい。

１．鉄　鏃

鉄鏃は古墳時代を通して最も普遍的な副葬品であり、数多くの古墳から出土するが、基本的に矢柄に装着された矢羽根を持った「矢」として副葬されたとみられる。その特徴は型式の多様性にあり、東アジアを見渡しても鉄鏃型式数は群を抜いて多い［水野 2007］。広域に同型式が確認でき、なおかつ形態変化が早いことで、出土古墳の築造年代を考える有力な手掛かりとできる。また、矢は使用すれば手元から離れる消耗性の高い武器であること、加えて鉄鏃は弓矢の矢の一部品に過ぎず、矢もしくは盛矢具に納められた束の状態で役目を果たすとみられ、鉄鏃単体での価値は必ずしも高くないと考えている［水野 2003］。

鉄鏃における「伝世」とは、標準的な使用年代と離れた年代観をもつ同型式の存在を認識することである。前提として、相対年代を必要とすることから編年のための型式分類が必要で、時間的に離れた同型式の認定が不可欠である。鉄鏃の型式は、自明のものとしてあるのではなく、目的を持った型式分類の結果として認識するものである。「伝世」の検討に入る前に、鉄鏃型式がどのように成立しているかを確認し、迂遠ではあるが鉄鏃編年の成り立ちから触れておきたい。

① 鉄鏃の編年研究と分類

鉄鏃の研究史は、近年、平林大樹により年表的に網羅されるが［平林 2018］、ここでは分類と編年研究に絞り、編年が研究の多くを占めた時期に立ち会ったものとして簡単にまとめておきたい。

80 年代には、特定の鉄鏃型式の分布や［茂山 1980］、県などの行政単位を基調とした地域を限定［小久保他 1983、小森 1984、白石 1986、飯島 1987］、あるいは中期・後期などの時期を限定しての編年が繰り返し試みられた［北野 1980、池上 1982、関 1987］。非常に数多くの論文が生まれ、その意味で鉄鏃研究が最も活発な時期であったともいえる。いずれも、先行研究である後藤守一［後藤 1939］や末永雅雄［末永 1969］の型式分類の問題を指摘して改良を試みている。その問題とは、出土品と分類案との対照が難しく、型式の設定に曖昧な部分があり、混乱していたことにある。いずれの分類も鏃身形を重視しており、例えば柳葉系の鏃身は前期だけでなく後期にもあり、これを時期判別する基準を見つけられずに、系統的な理解に混乱が見受けられた（図 10）。この時期の研究では論文ごとに分類案が提示されたが、後続の研究に引き継がれずに単発に終わった。その原因は、広域での動向がつかめないまま、地域や時期を限定したために型式組列を理解するのに資料が不足がちで、先行研究の問題を解決する代替分類案がなかったことにある。埼玉県の小久保徹らによる鉄鏃型式の各部形態のコード化（図 1）［小久保 1983］や「日本古墳文化研究会」による編年研究の一端として関義則が行った形態的要素の抽出［関 1986］など、後に繋がる試みもあったが、多くは分類要素を全て列挙したために分類は複雑化し、資料との対照が困難な点は解消できなかった。この背景には、高度経済成長期における行政発掘の拡大による資料の爆発的増加があった。未整理の膨大な資料を前に、未知の鉄鏃型式の出現による分類案破綻への恐れがあったように思う。対象地域や時期の拡大に躊躇が生まれ、既に土器研究で行われていた型式の系統的な理解へ注力できなかった。この編年や分類の手探りの状況は、武器・武具編年が実用段階に達した 2020 年代の武器研究からは理解し難い状況であるが、鉄鏃研究において未知の型式への恐れは、強迫観念のようなものになっていたように思う。転機は、杉山秀宏による「古墳時代鉄鏃について」である［杉山 1988］。先行研究の分析成果というよりも、杉山個人による精力的な全国の鉄鏃型式の収集によるところが大きい。数多くの資料名を挙げて土器や須恵器などの時期区分と対照する形で編年を作成したことで古墳時代の広域の鉄鏃編年は一気に実用段階に達した。本稿では、全国の鉄鏃型式がほぼ把握できたことを特に評価したい。

② 分　類

杉山秀宏により研究は新しい局面を迎えたが、研究課題の全てが解決したわけではなかった。杉山は生物学的分類を標榜した後藤守一の分類を推し進めて細分化した。しかし、鉄鏃は生物ではなく、変化はひとつの組列から派生することはない。編年画期の変化は服飾の流行などに近く、各型式組列を横断する形で起きた。そのため、後藤分類の問題点であった類似型式の分別がし難い問題も引き継がれた。例えば、最上位分類である鏃身分類の柳葉式と長三角形のどちらに該当するかが、編年上の文字通りの分かれ目となるのに、手元資料が杉山分類の何処にあたるかが判然としない場合があった。これに対して筆者は、鉄鏃型式の最上位分類をそれまでの研究の全てで採用されていた鏃身形から矢柄との装着形態へと変更し（図 2）、下位の鏃身、頸部、茎部の各部に分けたうえで、分類の階層化を進めた（図 4）［水野 1995、2003a］。これは、形態的特徴を並列的に処理するのではなく、編年に有効な要素を整理して分類の上位に置くことで、分類項目を減らして手元の鉄鏃と編年図との対照を容易にする実用的な効果をはかったものであった。同時に、未知の型式に対しては項目を付加するだけで対応でき（図 3）、分類体系を組み直すことなく取り込みを容易にし、学史的な強迫観念を払拭

頸		篦被		逆刺				A両刃								平面形						
1長頸	2短頸	1無篦被	2関篦被	3棘篦被	1腸抉	2重抉	3関有	4関無	1両丸	2片丸	3平	4鏑	5片平鏑	6片丸鏑	7切刃	8片切刃	9端刃	A柳葉	B長三角	C正三角	D五角	E鑿	名称	略号	後藤分類	出土古墳	
	○	○		○	○			○									○					短頸篦被腸抉両丸造柳葉式	221A1A	篦被両丸造腸抉柳葉式	城戸野2.4号.目沼8号	
	○		○			○		○									○					短頸棘篦被両丸造柳葉式	233A1A	広鋒両丸造棘篦被柳葉式	胄塚	
○		○		○					○								○					長頸篦被腸抉片丸造柳葉式	121A2A	篦被片丸造腸抉柳葉式	稲荷山(第1主体)	
○		○		○								○					○					長頸篦被腸抉片平鏑造柳葉式	121A5A		稲荷山(第1主体)	
○			○	○				○									○					長頸棘篦被腸抉両丸造柳葉式	131A1A	広狭鋒両丸造棘篦被腸抉柳葉式	城戸野4.号.鹿島20号	
○			○	○						○							○					長頸棘篦被腸抉平造柳葉式	131A3A	広鋒平造棘篦被腸抉柳葉式	見目1号	
○			○			○		○									○					長頸篦被両丸造柳葉式	133A1A	両丸造棘篦被鑿箭式	城戸野2号.胄塚.庚申塚.広木大町7号.長沖8号	
○			○			○			○								○					長頸棘篦被片丸造柳葉式	133A2A	片丸造棘篦被鑿箭式	城戸野2.4号.黒田4.5.8号.長沖10.21号.見目1号.南塚原5号.	
○			○			○										○	○					長頸棘篦被片切刃造柳葉式	133A8A	片切刃造棘篦被鑿箭式	黒田4.5.9.11号.鹿島24号	鹿島24号.諏訪山3号.御手長山

図１　埼玉県鉄鏃分類の整理案［小久保他 1983］

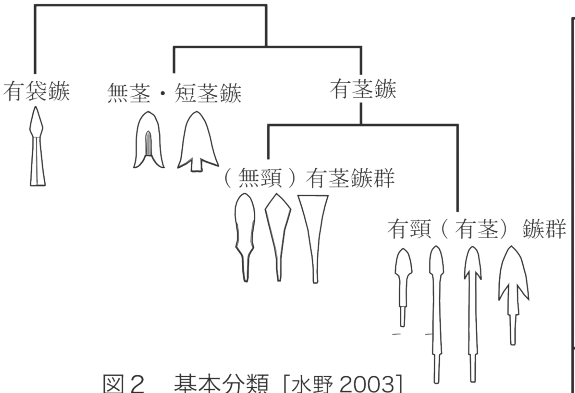
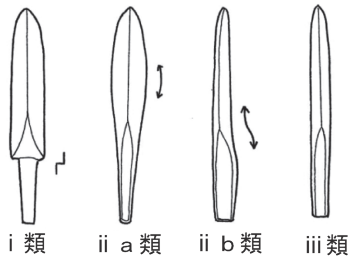


図２　基本分類［水野 2003］



ⅰ類　：鏃身部と茎部の境に段差をもつ。全面鍛造の面をもつ
ⅱａ類：鏃身部と茎部に段差がなく、茎部先端が薄くなる
ⅱｂ類：鏃身部と茎部に段差がなく、鏃身が薄くなる。
　　棒状素材を経ての鍛造による鏃身整形
ⅲ類　：鏃身部と茎部が同じ厚さをもつ。板状素材からの切断

図３　側面分類［水野 2008a］

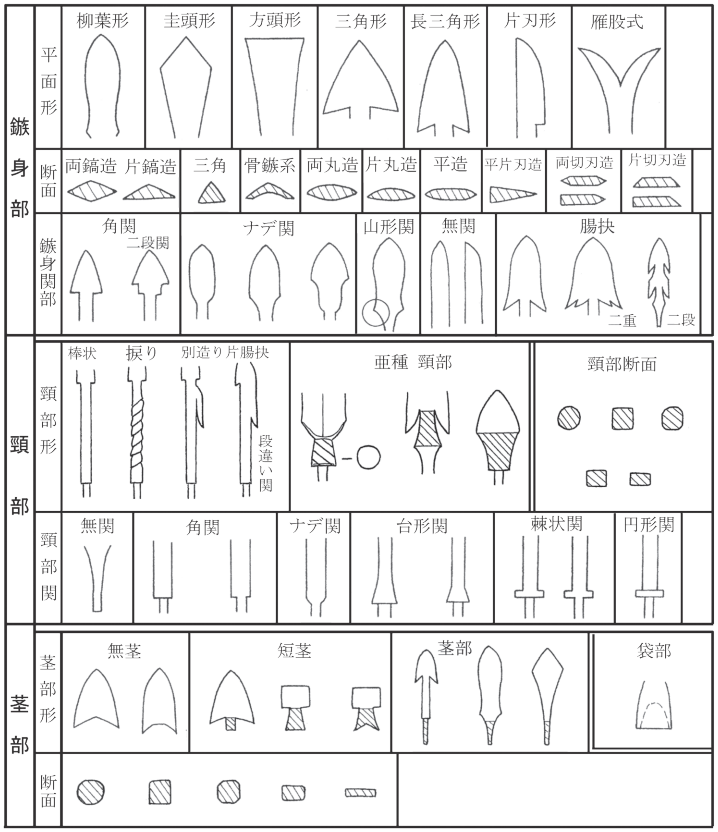


図４　鉄鏃分類細目［水野 2013a］

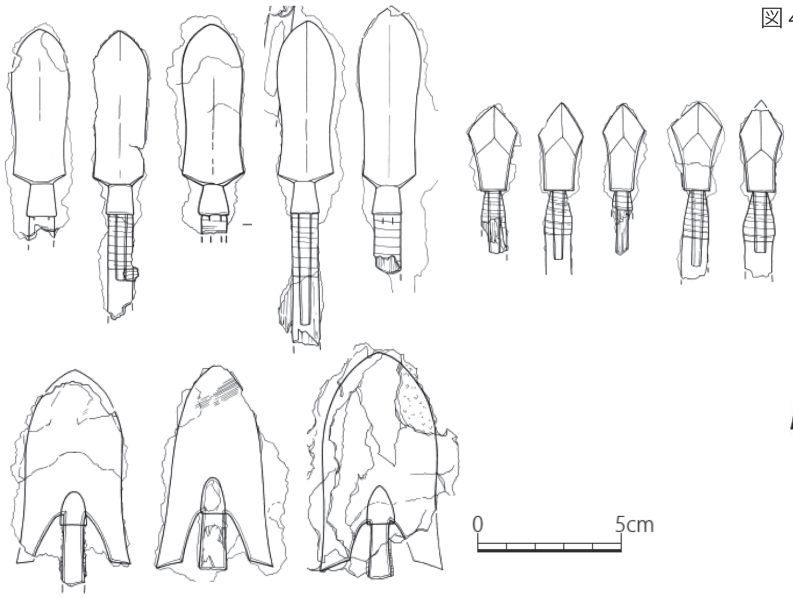


図５　同一埋葬施設出土の鉄鏃型式のバラツキ［橿考研 2018］

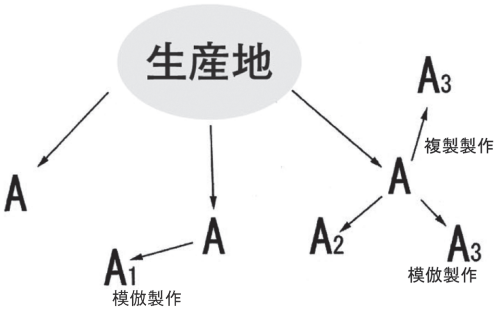


図６　鉄鏃型式の模倣による拡散イメージ
［水野 2013b 一部改変］

したことに意味があった。2010 年以降でも鉄鏃分類の基本構造は変わっておらず、大枠で肯首されているようである［川畑 2015、箕浦 2021］。

③ 多元的な生産と型式の把握

「伝世」の検証に必要な鉄鏃の同型式の認識は、型式分類の結果によるものであり、現在の分類は編年研究に有効なものとして選択した結果であることを触れた。それ以外にも鉄鏃型式については、鍛造によるハンドメイドであり、鉄素材の形状的な制約からも、同一工房で製作された同じ古墳埋葬施設から出土した同型式でも一定の形態的な差異をもつ（図 5）。加えて鉄鏃は、古墳時代を通じて基本的に多元生産と考えられ、これが型式の成り立ちに大きく関わっている。鍛冶遺構や鍛冶関連遺物が全国に分布しており、鉄鏃型式は大和王権で創出、あるいは採用されて量産したとしても、各地の首長の手元にわたった段階で、鉄鏃は各地で模倣され、類似品が生産されたとみられる。製作技術的に模倣品を分別できる場合はあるが［水野 2003c］、多くは区別できない。結果として、法量や型式的な特徴に揺らぎが生じたはずであるが、模倣品を分別できなければオリジナルと模倣品を含めたものが緩やかな括りの型式となる（図 6）［水野 2003b］。多元生産による型式の揺らぎを含む点が、同じ消費地編年でも、限定された工房での量産が想定されることの多い帯金式甲冑とは異なる。

もう一つの資料的特徴は、多元生産が生み出す鉄鏃の地域性にある。これは鉄鏃型式の組み合わせとしての様式の違いや地域色を持つ型式の存在があり、比較的広域に分布するものと、狭い地域に限定されるものなど、各型式の分布は重ねられたカードのように重複して広がり、様々な形があり得る［尾上 1993、水野 1995、豊島 2002］。例えば、後期の短茎鏃は東日本に集中的に分布し、西日本にはほとんど出土せず大きく古墳社会を二分する。また、中期の九州での片刃箭式鉄鏃は、小地域により存続期間が異なる場合があり、出土古墳などの情報から切り離された単体では時期的な評価が歪む可能性がある。

鉄鏃の広域編年に用いる型式分類は、単純化を進めた結果、編年に有効でない形態的特徴は下位に分類され、編年の指標とならないものは分類図に表れていない（図 4）［水野 2013a］。地域性を含めて検討するには、必要に応じて下位分類を補足する必要がある。

④ 編年とその時期区分

編年に伴う時期区分は 80 年代には鉄鏃自身の時期区分によっていたが、80 年代後半に入ると共通の時期認識となっていた須恵器編年［田辺 1981、中村 1979］との対応で示されることが多くなり、多様な専門をもつ研究者の参加する研究会の共通年代として、それまでの土器や埴輪の編年ではなく、和田編年［和田 1987］および 90 年代以降は前方後円墳集成編年［近藤他 1991］との対照が主流になる。その中で鉄鏃は畿内では田中晋作、藤田三郎などにより古市百舌鳥古墳群を中心とした中期の帯金式甲冑と組み合わせた時期区分が進められ［埋文研 1993］、その後の鈴木一有［鈴木 2017］や川畑純［川畑 2015］に引き継がれ、甲冑と鉄鏃は合わせて説明されることが多かった。

銅鏡研究では、岡村秀典による漢鏡編年があったが［岡村 1993］、森下章司により中国鏡の倭への流入時期の確認のために、和田編年を詳細化してより多数の編年を並列させて分析を行ったことから［森下 1998・2005］、銅鏡研究でも消費年代を把握する手法として一般化しつつある。また、同様の手法で鉄器全般の編年を用いたものとして川畑純による年代がある［川畑 2016］。近年の中四国前方後円墳研究会でもより多数の器物の編年を並列して古墳築造年代を理解しようとしており、この手法が主流となりつつある［中四国 2022］。

鉄鏃は、型式の認識方法から見て、鉄鏃編年は、模倣品による型式の揺らぎや地域性の影響を抑える意味で、地域を限定すれば、時期的な区分は細かくし易く、対象地域を全国規模に拡大すれば、時期区分は緩くなる傾向にある。筆者の編年でいうと古墳時代前期は特にその傾向が強く、大和に地域を限れば、５ないし６時期を識別することは可能であるが（図７）［水野 2008a］、広域編年では前期は３時期区分となる（図８）［水野 2013a］。これは、各地の前期古墳の少なさとともに古墳埋葬施設で共伴する型式数の少なさと、模倣品が混在することで同型式間の法量などの変化が把握し難くなることが大きい。つまり、編年作成時に、意識するかどうかに関わらず、鉄鏃編年は対象地域が設定されていることになる。例えば、古市・百舌鳥古墳群出土の鉄鏃と甲冑編年を、そのまま九州で当てはまると、畿内での一元的生産もしくはそれに近い状況の甲冑は問題なくとも、鉄鏃の一部は地域性により同型式の存続期間が異なる場合や、編年や分類に当て嵌め難い型式が出てくることになるため、地域性の表れ方に注意する必要がある。

また、鉄鏃の広域編年の時期区分の設定基準は、自身の経験からは必ずしも均一ではない。結論となる編年図を提示し［水野 2013a］、典型資料を抽出して各時期を説明するのが一般的であるが、その区分に明確さの強弱がある点を強調する機会はなかった。古墳時代を通しての広域編年では、特に強い区分は、型式群全体に横断的な変化のある前期１、中期１、中期３、後期２段階の開始であり、編年図の脇に三角形を付けて示した。逆に、前期３、中期２については、広域でも十分に識別はできるが、型式の退化が主要な変化となり、単独型式だと時期認定が難しくなる場合がある（図８）。なお、筆者の鉄鏃編年は、基本的に鉄鏃型式単独で作成しており、他の共伴遺物編年観との整合性は特に考慮していない。これは、80 年代からの古い研究形態を残すからであるが、他の副葬品編年との整合性を重視する、いわゆる総合的な判断は、極力加えていない。近年、中国四国前方後円墳研究会に代表される副葬品の編年の使用法に［中四研 2022］、多数の編年を並行させて和田編年を発展させる手法があり、一定の効果をあげている。今後は、個々の副葬品編年の独立性の評価、つまり、編年作成時にどの遺物編年と既に総合的判断を加えているのかの、いわば編年の成り立ちにも注意する必要性があるように思う。

広域編年についてのもう一つの注意点に、外来系の鉄鏃の存在がある。鉄鏃の新しい型式組列の出現は、外来系鉄鏃の影響によるものが多い［水野 2003b、鈴木 2003］。倭の領域だけでなく朝鮮半島や中国東北部にまで編年対象範囲を広げると、新規の型式の広がりは明確になるが［水野 2007］、単発的に倭に搬入されると、型式が本格的に導入される以前に存在することになり、編年と整合しない現象が起きる（図９）［水野 2013b］。例えば、中国や朝鮮半島南部の短頸鏃は、古墳時代前期並行で先行して普及するが、倭の領域には、基本的に中期１段階まで導入されない。また、長頸鏃は高句麗独特の型式であり、国内城などでは、半島南部と倭に先行して長頸鏃の使用が確認できるが、倭や伽耶へは中期３段階まで導入されない。これは広開土王による高句麗の南下時の、伽耶や倭との交戦を契機に導入されたとみられ、高句麗とは異なる長頸鏃が、伽耶と倭に長頸鏃が導入されており、導入初期のものは、伽耶と倭の長頸鏃は極めて近似している。また、頸部の棘状関も高句麗で先行して確認できるが、後期２段階より前には普及せずに、高句麗との交流を再開したとみられる後期２段階以降に一気に広域に普及する［水野 2007］。外来系鉄鏃は多くの場合に、舶載系馬具や陶質土器などと共伴することが多く、広域編年との不整合の原因を認識できるが、単独で出土すると型式によっては、時期認識を誤る可能性もある。

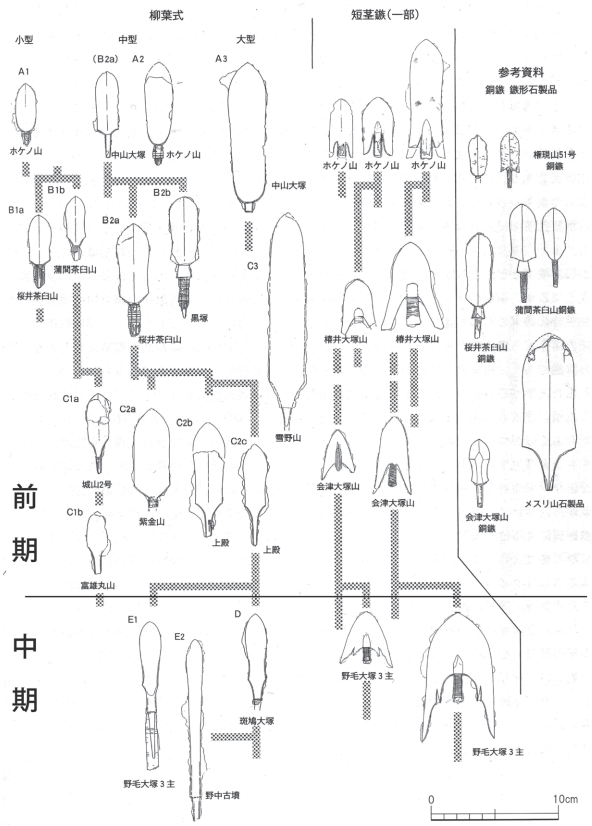


図７　前期鉄鏃群の変遷［水野 2008a］

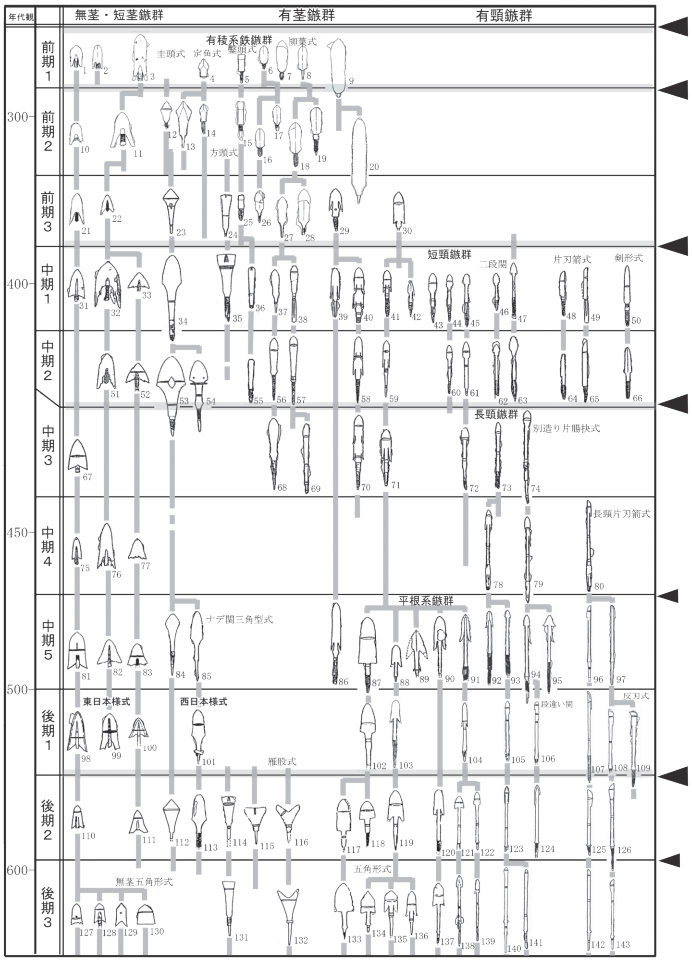


図８　広域編年［水野 2013a 一部改変］

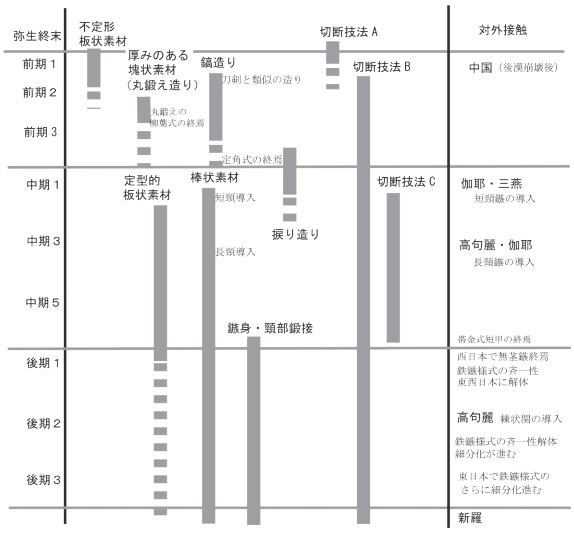


図９　鉄鏃の製作技法と外来系鉄鏃［水野 2013b］

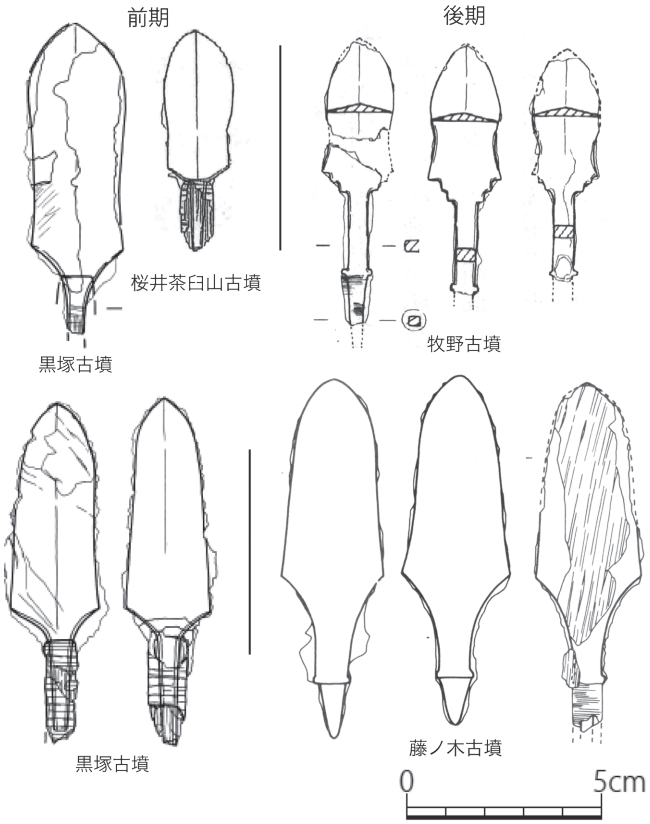


図 10　デザイン的な復古の可能性のある鉄鏃

表１　消費地編年における型式存続期間

	１期	２期	３期	４期
型式A	A			
型式B	B1	B1		
型式B	B1	B1・B2		
型式C	C1		C1	
型式C	C1		C1・C2	

⑤ 伝世の認識

鉄鏃の型式と分類がどのように成立しているかを説明してきたが、時間的に離れた同型式は分類結果から認識される。これを踏まえて鉄鏃に代表される消費地編年を考えてみたい（表1）。型式Aが出土する時期は1期と認識する。次に型式Bが1期と2期にわたり出土すれば、その型式の存続期間が1～2期と認識する。B型式がB1、B2に細分化できた場合に、2期にB1、B2が出土した場合、B1の存続期間は1～2期までと解釈され、1期に製作されたものが2期まで長期保有されてもそれを認識することはできない。「伝世」を認識するには、C型式のように、連続しての出土ではなく、型式の標準的な存続（使用）期間から離れた年代を認識する必要がある。このとき、もし多数の伝世例が認められれば、その型式の標準的な存続期間を広げる方向で修正することとなり、伝世は認識できなくなる。つまり、消費地編年とは、その型式の標準的な使用・廃棄の年代を基準に、そこから断絶した出土年代が得られないと伝世を認識できない。銅鏡編年などの生産地編年ではあらかじめ生産年代が与えられているため、出土年代はそれ以降のどこかであり、出土年代との間に時期差を持つのが当然で、鉄鏃のような型式の標準的な存続期間を考慮する必要は小さい。

鉄鏃の製作から廃棄･副葬までの工程は､鉄器として生産→矢として製作→流通→保管→使用（戦闘･儀礼・副葬）・廃棄のイメージである。鉄鏃は主に古墳副葬を単位とした消費地編年であるが、もともと鉄鏃製作から副葬（廃棄）までの時間は、世代単位などの長期に渡ることは極めて少ないと考えていた。それは、矢は消耗品であり、矢と矢の束の姿に副葬品としての価値があり、古くなった矢を解体して、矢柄や矢羽根を付け替えて鉄鏃を継続使用するほどの価値はないと考えていたからである。

⑥ 型式の混交

古墳時代を通して編年で設定した時期区分を超える例がどのくらいあるか､検討してみた。しかし、当初の目論見がはずれて想定していた標準的な使用年代を超えた型式の確認例が増えれば、使用年代の幅を広げることとなるので、方法論的に例外的にしかなり得ないことをあらためて確認した。しかしながら、前期の有稜系鉄鏃が中期に出土することはなく、まして後期には出土しない。それでも例外的な型式の混交は、木槨系の埋葬施設を持つ愛媛県高橋仏師1号墳に、前期1段階の典型的な型式である柳葉式A1類や鏃身の厚みのある短茎鏃とともに、前期2段階に特徴的な柳葉式B2類が混在した［愛媛県2008］。前期1段階の鉄鏃が前2段階の鉄鏃とともに出土する例は他に確認できない。時期的に連続しており、長期保有とみられる。また、中期では、奈良県兵家12号墳の中期1段階相当の深い二重腸抉をもつ短茎鏃が長方板革綴短甲とともに小札鋲留眉庇付冑やTK23並行の須恵器と共伴しており、標準的な使用年代から離れて出土した例となる。あらためて考えると鉄鏃が市場等で自由流通するとすれば、セット関係が崩れたり、時期的混交がより多く起きると思うが、古墳出土品をみる限り、そうはならない。後期の横穴式石室では、追葬により副葬品が混乱し、型式の混交が認識できない可能性があるが、埋葬時の矢束が非常によく残る千葉県東南部ニュータウンの古墳群で、長頸鏃の型式変化と計量をもとに整理したところ、型式変化は計量の変化とともに連続的なカーブを描き、連続した近接時期の副葬でも、前段階の型式との混交はほとんど確認できなかった［水野1993］。これは、鉄鏃が盛矢具を単位とした束で戦闘や葬送に使用されて、新旧の束が混ざる機会がほとんどなかったものとみられる。

⑦ 考古学的分類と古代人の認識

器物として鉄鏃が長期保有されて伝世する場合は、表1で触れた通りと考えている。ただし、研究

史で触れたように、離れた時期を持つ同一型式の認定には分類が必要であるが、その分類は考古学者が編年目的で作成したもので、自明のものでないことを示した。当然、現代考古学者と古墳時代人の認識が一致するとは考え難く、もし鉄鏃型式に復古的なデザインが採用された場合には、編年用の型式分類に従う限り、認識できない可能性がある。例えば、古墳時代前期の有稜系の柳葉式鉄鏃は、後期古墳から出土したことはない。しかし、後藤守一らの分類で型式認定が曖昧となる例があったように、後期２段階の奈良県牧野古墳などに短頸鏃化した柳葉系の鏃身を持つものがある。鏃身の大きさは前期の桜井茶臼山古墳の柳葉式 B1 類に酷似し、刃部に明瞭な S 字状カーブをもつ。報告の実測図では鎬状の線が鏃身に描かれた片鎬で表されている。鏃身に重点を置いたかつての分類では、前期と後期によく似た柳葉式が存在することになり、混乱を招く型式である。編年目的の現在の分類では頸部をもつため後期の有頸鏃としてに前期柳葉式と異なる型式と認識する。類似型式の存在で分類に不整合が生じた研究史が示すように､時期が離れていても鏃身形の類似した鉄鏃は確かに存在する（図10)。もう一つの例として、前期の有茎鏃である三角形ナデ関式のデザインが復古的に採用された場合には、必ずしも有茎鏃として再生するとは限らない。奈良県藤ノ木古墳出土品などでは短頸鏃化して棘状関を持つ三角形ナデ関式があり、前期の黒塚古墳の三角形ナデ関式とは別型式と分類されて、デザイン的な復古を認識できない可能性が高い。先行する型式組列は見当たらず、突然出現したようにみえるため、検証は困難であるが、デザイン的な復古が行われた可能性があるように思う。２つの例は、現在の分類では後期の関をもつ型式は矢柄との装着法を重視する視点から有頸鏃として別型式と認識されるが［水野 1995］、かつては型式的分別が難しい型式であった。ということは、古墳時代人の視点では、近似したあるいは同一型式と認識されていた可能性をもつのではなかろうか。1990年代までの鉄鏃研究は、時期の異なる類似型式の分別基準を探求してきたのであり、鏃身形が似るという括りはこれに逆行するものであるが、古墳時代後期に前期的な柳葉系の鏃身をもつ一群は確かにある。相対編年のための分類では全く別のものとなるが、矢柄に装着された姿が、シルエットとして似るのも事実である。これらに先行する型式組列を確認できない場合には、復古的なデザインを採用した鉄鏃の候補になると思われる。今回の編年を離れたデザイン的な復古という視点は、従来と異なる全く別な型式の括りとなる。外来的鉄鏃の影響でもなく、編年のなかで遊離した型式を考える上で重要な視点とみられ、今後も検討を続けたい。

２．刀剣類

消費地編年の鉄鏃にとって「伝世」は方法論的に認識が難しく、実際に時期区分を超える例は少ない。その一方で、鉄鏃におけるデザイン的な復古については、これまで指摘されたことのない視点として、いくつかの可能性を指摘した。そこで他の消費地編年の武器からデザイン的な復古を考えるために刀剣類を取り上げる。刀剣類とは、直刀、剣、ヤリである。

① 直刀と素環頭大刀の伝世

直刀の編年は、臼杵勲以来の研究であるが、編年細分化は進んでいない［臼杵 1984］。現状をまとめると、前期では無関を含んだものから関の明瞭化へと変化し、中期に入って茎部尻に隅切りなどの新型式が出現し、刃部の長大化が進む。後期に入り倭系大刀の金属装具化が進み、金銅板や象嵌を用いた捩り環頭大刀が出現する。後期後半に金属製鍔が出現し、背側にも関を持つ両関が出現するなどの変遷の大枠はつかめるが、金属製の柄頭などの装具を持たない直刀は、型式的な特徴に乏しく、細

分化した時期を認識できない。その中で、例外的に「伝世」を認識できる資料に奈良県東大寺山古墳出土の青銅製の環頭部のつく大刀がある［東大寺山 2010］。象嵌による銘文に中国の後漢の年号である「中平□年」銘が確認できたことで、184 ～ 189 年の生産年代が判明した。東大寺山古墳の築造年代が古墳時代前期後半（4 世紀半ばから後半）であり、年代差が大きいために「伝世」を認識できた。東大寺山古墳からは銘文を持つ刀の他にも多数の長大な素環頭大刀や直刀が出土しており、これらにも中平銘大刀と同様に長期伝世品を含む可能性はあるが、銘文なしには生産年代が確認できず、「伝世」を認識できない。このことは他の古墳出土の素環頭大刀にも言え、長期伝世品を含む可能性はあるが、銘文などで生産年代を把握できない限り「伝世」を認識できない現状を教えてくれる。

② 素環頭大刀と捩り環頭大刀の関係

素環頭大刀は古墳時代前期を中心に中期まで出土し、前期出土品の多くは大陸からの舶載品とみられている。本来、中国出土の後漢から三国時代の素環頭大刀の柄は、紐を巻き付けるような簡易な装具が一般的で大型の木製装具は用いられていない［水野 2022］。ところが、古墳出土品の素環頭大刀の柄装具には環頭部の半ばまでを木製装具で覆った倭装に改変された例が、奈良県黒塚古墳や島根県神原神社古墳など多数存在し、古墳時代中期前半の野毛大塚古墳にも確認できる。その姿を古墳時代後期に復古的に再現したものに捩り環頭大刀がある（図 11）。捩り環頭大刀は、中期に流入した金属装具や象嵌をもつ舶載系大刀の影響を強く受けて、倭系大刀が金属装化したものである。環頭部の半ばまで木製装具で覆われた姿を、中期に確認できる楔形柄頭に C 字形の捩り環を取り付けて再現しており、外見は古墳時代前期の倭装の素環頭大刀がベースであるが、象嵌や鍍金、金銅板の使用など最新技術が導入されている（図 12）。デザイン的復古と言っても型式分類上は全くの別のものである。捩り環頭大刀の出現時期は、文献にみる継体天皇の活動時期と重なるとみられ、後期前半までの捩り環頭大刀の出土分布は継体天皇の勢力基盤との関りが指摘されている［高松 2007］。これまで目立つ古墳のなかった越前や琵琶湖北岸などからの捩り環頭大刀の出土地は、継体天皇の后などの出身地と重なる（図 13）。また、継体天皇は『日本書紀』に「応神天皇五世の孫」とあるように、自己の正統性を主張する必要性があり、復古的なデザインをもつ捩り環頭大刀の創出に、新勢力の象徴として価値を見出したと考える［水野 2022b］。これは実物の「伝世」とは異なるデザイン（意匠）的な復古のひとつの形とみられる。

③ 刃関双孔の剣とヤリ

剣は、刀と比べても要素が少なく、細かい編年が難しい資料で、標準的使用年代と出土年代のズレを認識しにくい器物である。その中で長期保有が指摘できる数少ないものに、刃関双孔をもつ剣がある。刃関双孔は弥生時代後期から終末にみられる鹿角や木製柄（把）装具に対応した刃部側関付近に横に並ぶ目釘孔をもつ剣である（図 16）。古墳時代に入ると、刃関双孔をもつ剣は確認できなくなり、刃関双孔を持つ剣身はヤリとして、長柄の装具に付け換えられて古墳から出土するようになる（図 17）［水野 2022a］。ヤリは刃関双孔を目釘孔として装具固定に使用しておらず、刃関双孔は木製装具に隠れて外からは確認できないことから、刃関双孔に特に意味はなく、古墳時代に入って剣をかき集めてヤリとした際に、刃関双孔を持つものが混入したとみられる。14 点のヤリが出土した前期前半の奈良県黒塚古墳をみる限り［橿考研 2018］、茎部長や刃部長などの形態的なばらつきは大きいが、関付近までを木製装具で覆い、外装を黒漆で固めることで、ヤリとして統一感を出したとみられる。刃関双孔を持つ剣身は、個々の生産時期が明確でないが、古墳時代前期に刃関双孔をもつ剣出土がほ

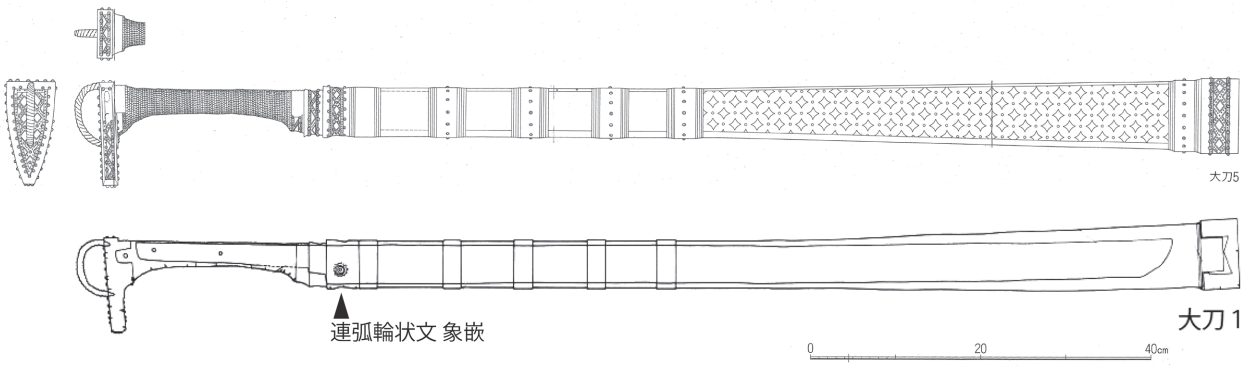


図 11　奈良県藤ノ木古墳振り環頭大刀（大刀 1）

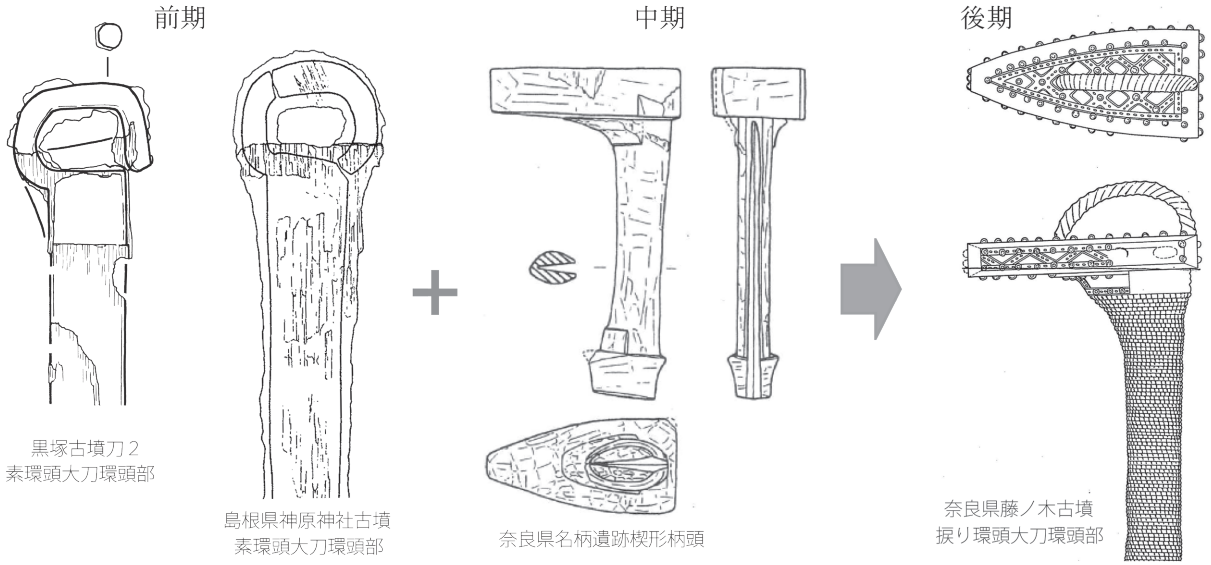
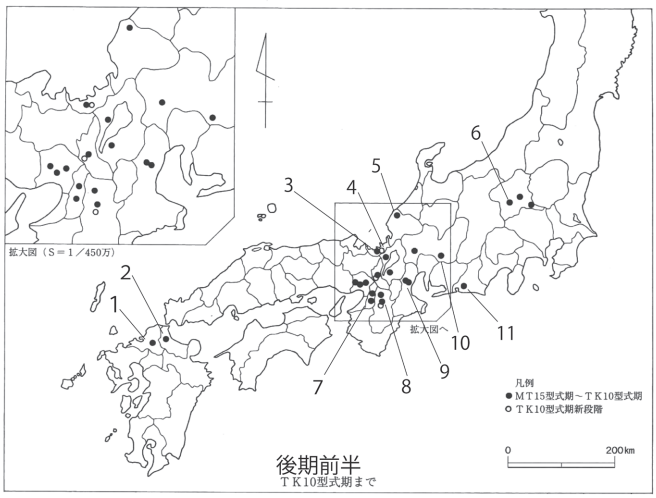


図 12　前期素環頭大刀のデザイン的な復古としての振り環頭大刀



1	福岡県　寿命王塚古墳
2	福岡県　箕田丸山古墳
3	福井県　十善の森古墳
4	滋賀県　鴨稲荷山古墳
5	福井県　神奈備山古墳
6	群馬県　前二子塚古墳
7	大阪府　峯ケ塚古墳
8	奈良県　宮塚古墳
9	三重県　井田川茶臼山古墳
10	岐阜県　虎渓山1号墳
11	静岡県　団子塚9号墳

図 13　振り環頭大刀後期前半の出土分布と主な出土古墳［高松 2007 一部改変］

とんど確認できないことから、標準的使用年代からの断絶が明確で「伝世」と認識できる。大和での刃関双孔をもつ剣身の出土は、いずれも剣でなくヤリとしてであり、奈良県黒塚古墳や奈良県上牧久渡 3 号墳などに確認できた（図 16）［水野 2022a］。大和での出土最新例は、前期中頃のメスリ山古墳出土の212点のヤリ中に確認できた。これらの刃関双孔をもつ剣を弥生時代からの伝世品とした場合、

中平銘大刀の場合と同様に、刃関双孔をもたない剣身にも長期伝世品が含まれるが「伝世」と認識できない可能性が高い。また、杉山和徳の研究により静岡県間門松沢１号墳などの古墳時代中期の刃関双孔を持つ剣の出土を東日本にわずかに確認しており［杉山 2020］、刃関双孔を持つ剣身の終焉は必ずしも大和と一律とは限らない。

④ 刃関双孔をもつ剣の復古

剣は、弥生時代では大型武器の主力であり、古墳時代前期に入ると直刀や素環頭大刀と共伴し、剣と刀類の割合は地域差があるものの、前・中期においても剣が優勢な地域も少なくない［古代歴史 2022］。剣は、中期に刃部の長大化が進み、広く出土するが、古墳時代後期に急激に姿を消す。その中で古墳時代後期後半の特異な剣に奈良県藤ノ木古墳出土例がある（図 14）［橿考研 1993］。外装込みで全長約 78㎝、形態は古墳時代中期後半の岩本分類の有段有突起Ｂ類に相当し［岩本 2006］、木製あるいは鹿角装具の姿を、金属装で正確に再現する（図 15）。剣の外装には金銅板や銀板を多用し、紺色のガラス小玉が多数付着し、その姿は藤ノ木古墳出土の捩り環頭大刀と酷似し、両者は同一工房の製作と考えて良い（図 11）。

有突起をもつ剣装具自体が、弥生時代のＹ字形鹿角装具の突起を模したものと言われ（図 18）、復古的なデザインである。年代的には有段有突起Ｂ類の剣の標準的使用年代を中期後半（中期４・５段階）とすると、藤ノ木古墳の築造年代は古墳時代後期後半（後期２段階）であり、両者には時間的な断絶があり、復古的なデザインと評価できる。さらに特徴的なのは剣身の刃関双孔（報告では両関の鏥元孔）である。装具に隠れて目視で確認できず、やや不鮮明なＸ線写真に頼るしかないが、刀匠河内國平による復元剣の製作でも刃関双孔状の穿孔を施しており、本稿はその時点の見解に従うものとする。刃関双孔をもつ剣身は静岡県間門松沢１号墳など断片的に中期にも出土が確認できるが、大和では前期中頃までしか出土は確認できない。大和を基準とすると標準的な使用年代の後端から約 200 年の期間をおいて刃関双孔が復活したようにみえる。剣身が伝世品でないことは、連弧輪状文と呼ぶ象嵌を施されており明らかである。単純に形態の近似から刃関双孔との直接的な関係を想定して、刃関双孔の復古ととらえたことがあるが［水野 2022］、連弧輪状文の象嵌は、表裏にあるとみられ、双孔に視覚的な効果を期待する点で、弥生時代の柄装具に隠れる刃関双孔とは異なる。また、刃部関の「鏥元孔」と連弧輪状文は、藤ノ木古墳出土の捩り環頭大刀１、大刀５に確認できる。この点から、藤ノ木古墳の剣の刃関双孔は、捩り環頭大刀の「鏥元孔」との関係が深いと言える。では、「鏥元孔」とは何であろうか。最も古い捩り環頭大刀として古墳時代中期末から後期初頭の大阪府峯ケ塚古墳例があるが、これらにも「鏥元孔」が確認できることから、捩り環頭大刀の創出時に、付加された要素とみられる。しかし、ここでいう「鏥元孔」は目釘孔に似るが装具等の固定への使用は確認できず、必ずしも合理的な説明が難しい。周囲に象嵌が施される例からも視覚的要素が強く、刃部関というよりも、日本刀でいう「鯉口を切る」ような、鞘から抜き出し初めの刃部に対しての呪術的な意味合いが強く、これを剣の両関に施したものが藤ノ木古墳の剣とみる。その上で、倭装刀剣の要素の中で「鏥元孔」に繋がり得るものに刃関双孔があり、特に、古墳時代前期末～中期に入って装具の固定から解放された刃関双孔と考える。杉山和徳が指摘するように、石川県下開発茶臼山９号墳出土例、神奈川県吾妻坂古墳出土例などは装具からみて剣であるが、刃関双孔に装具がかからず、露出していた可能性が高い［杉山 2020］。下開発茶臼山９号墳出土例や間門松沢第１号墳出土例は、弥生時代の列島内出土品にはみられない全長 70㎝を超える長剣で、弥生時代からの伝世品とは断定し難い。古墳時代の剣に穿孔した可能性があり、刃関双孔の意味は、この時期に変化した可能性が強い［杉山 2020］。「鏥

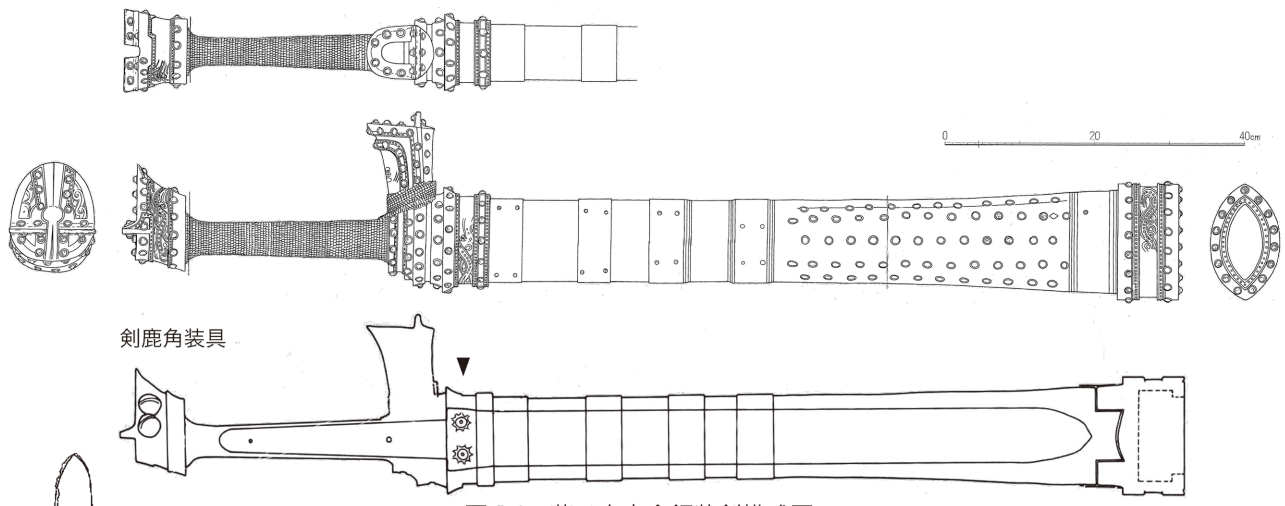


図 14　藤ノ木古金銅装剣模式図

図 15　鹿角製剣装具

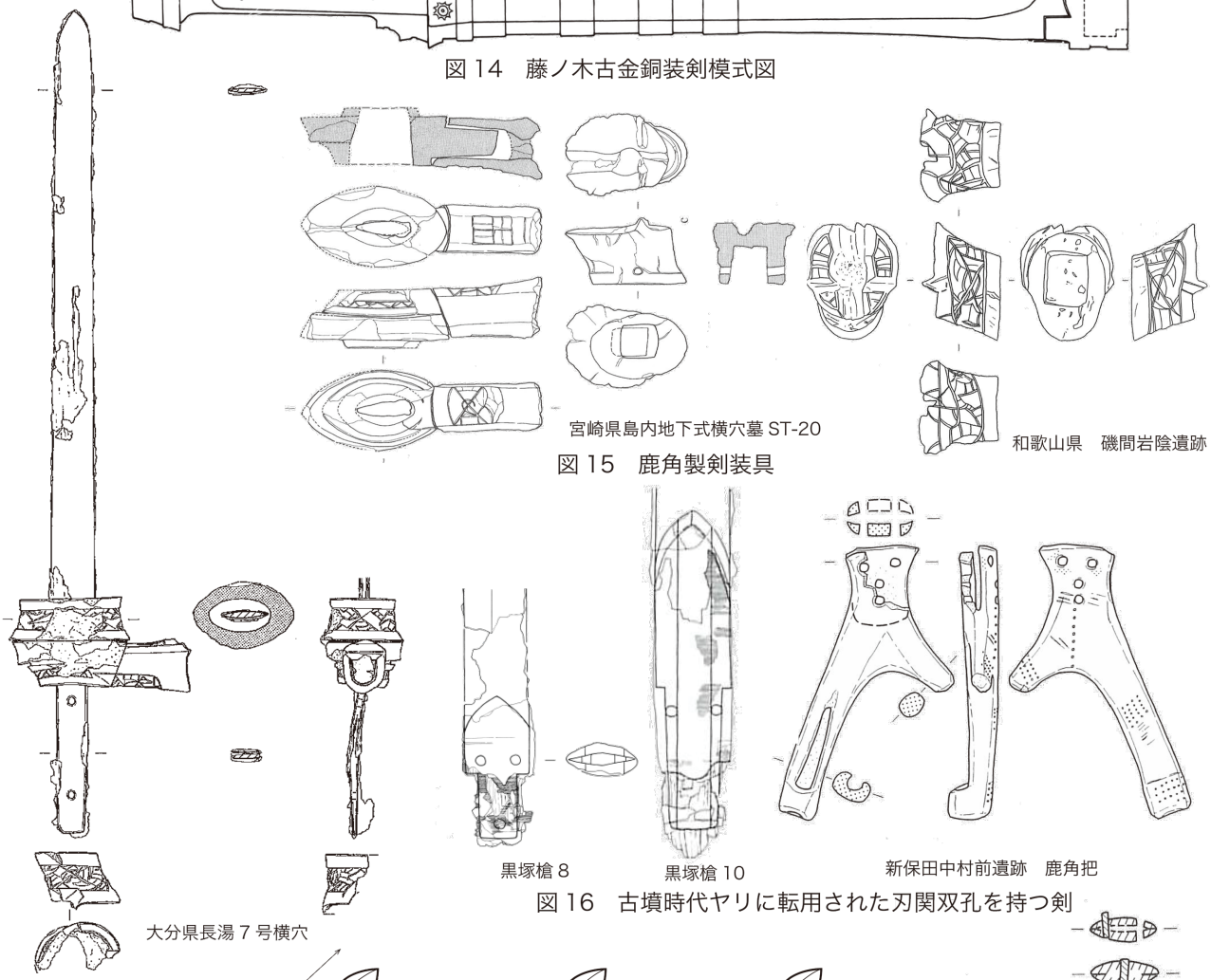


図 16　古墳時代ヤリに転用された刃関双孔を持つ剣

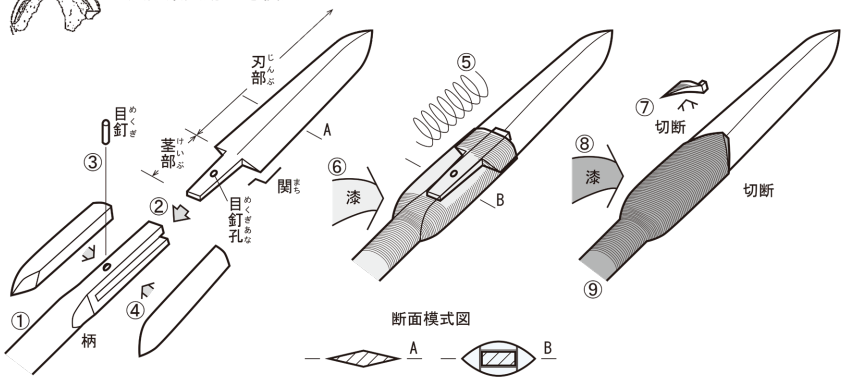


図 17　ヤリ装具の構造［水野 2022］

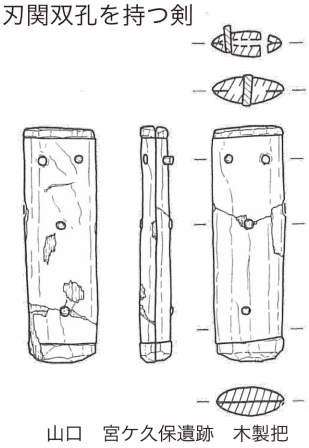


図 18　弥生時代剣装具［豊島 2010］

元孔」が刃関双孔に繋がるとすれば情報伝達の手段が問題となるが、X線写真で確認した通りの刃関双孔であれば、上下のズレなどの詳細情報は、古墳時代後期における実物資料の存在を暗示する。

しかし、確認数は極端に少なく、明確な有段有突起をもつ古墳時代中期の剣に刃関双孔をもつ剣身が使用された例も確認できないため、可能性の指摘にとどめ、舶載系大刀を含めて今後の資料の増加を待ちたい。

藤ノ木古墳の金属装の剣は、他にない例外的な存在であるが、刃関双孔を強く意識させる剣が古墳時代後期後半の藤ノ木古墳から出土したことは興味深い。外装を含めて復古的なデザインの採用理由を考古学的に論証することは難しく、被葬者がどこまで副葬品に関与できるかも論証不能であるが、継体天皇の正統性の主張のひとつとして、復古的なデザインを持つ捩り環頭大刀を創出したとみることが妥当であれば、藤ノ木古墳の復古的な金銅装剣についても正統性の主張があった可能性がある。調査を行った前園実知雄は藤ノ木古墳の被葬者は穴穂部皇子と宅部皇子を想定しており［前園 2006］、物部氏が敗北して蘇我氏が台頭し、前方後円墳が終焉を迎えるなどの伝統的な秩序の改変期にあたり、捩り環頭大刀２点とともに復古的な剣の副葬に、被葬者の性格が反映される可能性があると考える。

まとめ

消費地編年の鉄鏃の「伝世」は、方法論的に認識が難しく、伝世の例も極めて少ない。同時に鉄鏃のデザイン的な復古も、鉄鏃に型式的要素が少なく、復古の際に変形すると別型式に分類されることから復古の認識も難しい状況である。しかし、捩り環頭大刀にみる前期倭装大刀の復古や、藤ノ木古墳の復古的な剣など、デザイン的な復古を後期の刀剣類に確認することができた。これにより復古的なデザインを持つ鉄鏃が存在する可能性が高まり、候補としてかつて型式分類の混乱を招いた型式を取りあげた（図 10）。広域編年において、外来系鉄鏃の影響などの理由のつかない唐突にみえる型式組列の出現に、時期の離れた鏃身形態の類似が認められる場合には、デザイン的な復古を考慮する余地があると考える。

最後に、伝世と復古というこれまでにない視点での考察の機会を与えてもらい、従来、当然と考えていた鉄鏃編年や分類の目的や、漠然ととらえていた編年の特性について検討ができた。結論は十分ではなく、継続的な検討が必要であるが、まずは取り組めたことに感謝しつつ、稿を終えたい。

本稿は、JSPS 科研費 JP21K18388、JP20K01086、JP20H00039 の成果の一部を含む

引用文献

飯島武司　1987「後期古墳出土の鉄鏃について」『東京都埋蔵文化財センター研究紀要』V
池上　悟　1982「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』1
岩本　崇　2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』90-4 日本考古学会
岩本　崇　2020『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
愛媛県埋蔵文化財センター　2008『高橋仏師１～４号墳　ほか』埋蔵文化財発掘調査報告書第 146 集
岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55
尾上元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』40-1
川畑　純　2015『武具が語る古代史　古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会
川畑　純　2016『甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究』科研報告

北野耕平　1980「古市古墳群の鉄鏃　上」『神戸商船大学紀要文化論集』28
小久保徹・浜野一重・利根川章彦・山本禎・高橋好信・田中正夫・岩瀬譲・滝瀬芳之　1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究－ 鉄鏃について－」『埼玉県埋蔵文化財事業団研究紀要』
小森哲也　1984「栃木県内古墳出土遺物考」『栃木県考古学会誌』第８集
後藤守一　1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類學雑誌』54-4
古代歴史文化研究会　2022『刀剣－武器から読み解く古代社会－』ハーベスト出版
近藤義郎　1991『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版
白井久美子　1986「東国後期古墳分析の一視点」『千葉県文化財センター研究紀要』10
茂山　護　1980「二段逆刺を有する鉄鏃について」『宮崎県立総合博物館研究紀要』５
末永雅雄　1969「日本鏃形式分類図」『古代学』16-2・3・4 合併号
杉山和徳　2020「東日本の刃関双孔鉄剣」『日々の考古学』３　東海大学考古学研究室
杉山秀宏　1988「古墳時代鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集　第８集』
関　義則　1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号
鈴木一有　2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集
高松雅文　2007「捩り環頭大刀と古墳時代後期の政治動向」『勝福寺古墳の研究』大阪大学考古学研究室
田中晋作　1981「武器の所有形態からみた古墳被葬者の性格」『ヒストリア』９
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
中国四国前方後円墳研究会　2022『中期古墳研究の現状と課題Ⅵ』中国四国前方後円墳研究会
東大寺山古墳研究会他　2010『東大寺山古墳の研究』真陽社
豊島直博　2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所　同朋舎出版
豊島直博　2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
中村　浩　1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』財団法人大阪文化財センター
奈良県立橿原考古学研究所　1993『斑鳩　藤ノ木古墳第２・３次調査報告書』株式会社便利堂
奈良県立橿原考古学研究所　2018『黒塚古墳の研究』八木書店
広瀬和夫　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　中国四国編』近藤義郎編
平林大樹　2018「古墳副葬矢鏃の分析視角」『古代武器研究』vol.14　古代武器研究会
埋蔵文化財研究会編　1993『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第 33 回埋蔵文化財研究集会
前園実知雄　2006『斑鳩に眠る二人の貴公子』新泉社
水野敏典　1993「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬－長頸鏃の形態変遷と計量の相関にみる武器供給から－」『古代』第 96 号　早稲田大学考古学会
水野敏典　1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢Ⅳ　滝口宏先生追悼考古学論集』
水野敏典　2003a「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』第 14 集
水野敏典　2003b「日韓鉄鏃にみる相対年代観」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会
水野敏典　2003c「古墳時代中期の武器・武具にみる交流の諸相と斉一性」『古代近畿と物流の考古学』学生社
水野敏典　2005「日韓鉄鏃変遷にみる武器の解釈」『古代武器研究』Vol. 5　古代武器研究会
水野敏典　2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題－東アジアの中の鉄様式の展開－」『古代武器研究』Vol. 8　古代武器研究会
水野敏典　2008a「前方後円墳出現前後の副葬品構成と鉄鏃－副葬品からみたホケノ山古墳の検討－」『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所編
水野敏典　2008b「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『橿原考古学研究所論集 15 集』八木書店
水野敏典　2013a「鉄鏃」『古墳時代の考古学４　副葬品の型式と編年』同成社
水野敏典　2013b「古墳時代鉄鏃の製作技術と編年 」『古墳出土品がうつし出す工房の風景』大阪大谷大学博物館報告書 61
水野敏典　2022a「黒塚古墳にみる武器副葬とは何か－古墳時代前期前半の武器副葬の一様相－」『古代武器研究』vol.17　古代武器研究会

水野敏典　2022b「刀剣からみた藤ノ木古墳」『大和の中の東アジア　藤ノ木古墳』第 12 回奈良県立橿原考古学研究所東京公開講演会 共催　由良大和古代文化研究協会　朝日新聞社　奈良県立橿原考古学研究所
箕浦　絢　2021「関東における古墳副葬鉄鏃の変遷」『駿台史学』171　駿台史学会
森下章司　1998「古墳時代前期の年代試論」『古代』105　早稲田大学考古学会
森下章司　2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』89-1　日本考古学會
和田晴吾　1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』34-2　考古学研究会

図版出典（実測図）

図 10　黒塚古墳　鉄鏃：橿考研編　2018『黒塚古墳の研究』八木書店
桜井茶臼山古墳　鉄鏃：［水野 2008a］
牧野古墳　鉄鏃：橿考研編　1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会
藤ノ木古墳　鉄鏃：橿考研編　1990『斑鳩　藤ノ木古墳　第一次調査報告書』斑鳩町教育委員会
図 11　藤ノ木古墳　捩り環頭大刀：橿考研編　1995『斑鳩　藤ノ木古墳　第二・三次調査報告書』斑鳩町教育委員会
図 12　黒塚古墳　素環頭大刀：橿考研編　2018『黒塚古墳の研究』八木書店
神原神社古墳　素環頭大刀：蓮岡法暲編 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
名柄遺跡　楔形柄頭：藤田和尊編　1995『名柄遺跡第 4 次発掘調査報告』御所市文化財報告書第 19 集
藤ノ木古墳　捩り環頭大刀：橿考研編　1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町教育委員会
図 14　藤ノ木古墳　剣：橿考研編　1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町教育委員会
島内地下式横穴墓 ST-20 鹿角装具：中野和浩編　2001『島内地下式横穴墓群』宮崎県えびの市教育委員会
磯間岩陰遺跡　鹿角装具：堅田直　1994「磯間岩陰遺跡」『田辺市史』第 4 巻資料編 I
長湯 7 号墳　剣：甲斐寿義編　2004『長湯横穴墓群　桑畑遺跡』大分県文化財調査報告書第 171 輯　大分県教育委員会
図 15　新保田中村遺跡　鹿角把：［豊島 2010］